Title	「ヴィーン文学」に観られるスラヴ人の問題 : P. ヘーニッシュの『我が父の小さき姿』を一例として
Sub Title	Probleme der Leute aus slawischen Ländern, die man in der "Wiener Literatur" beobachten kann.
Author	江原, 吉博(Ehara, Yoshihiro)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1987
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.32 (1987.) ,p.17- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000032-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Annu. Rep. Kyoritsu
Coll Phrm.

「ヴィーン文学」に観られるスラヴ人の問題

——P．ヘーニッシュの『我が父の小さき姿』を一例として——

江原　吉博

Probleme der Leute aus slawischen Ländern, die man in der „Wiener Literatur" beobachten kann.

Yoshihiro EHARA

In Wien wohnen heute viele Leute aus slawischen Ländern als Österreicher, obwohl Österreich nach dem 1. Weltkrieg die slawischen Länder verloren hat, die bis dahin die Bestandteile der k. u. k. Monarchie waren. Diese Leute gestalten die zweite und dritte Generation von den Slawen, die in der Monarchie-Zeit von heutigen Polen, Tschechoslowakei oder Jugoslawien eingewandert waren.

Die erste Generation nahm zwar sozusagen Deutschtum selber an, aber für die zweite oder die dritte scheint es schon im Blut von Natur aus zu sein. Als Staatsbürger des neuen Österreichs erzogen, beherrschen die jüngeren Generationen schon gut Deutsch und können slawische Sprachen nicht mehr.

Wenn man einige Werke der jungen Schriftsteller, die in Wien wohnen, liest, kann man jedoch Schwierichkeiten beobachten, in die sie geraten. Hier behandle ich als Beispiel eine Erzählung von Peter Henisch: „DIEKLEINE FIGUR MEINES VATERS."

Er ist 1943 in Wien geboren und jetzt schreibt er als freier Schriftsteller Stücke, Erzählungen und Romane.

Wenn man diese erste Erzählung von ihm liest, versteht man, daß der Schriftstelle an einer Art Identitätslosigkeit leidet und versucht, eine Biographie seines alten Vaters zu schreiben, um dadurch sich selbst zu begegnen. In seinem Versuch erkennt man aber ein ernstes Problem, das eine slawische Familie während des 2. Weltkriegs überwinden mußte, und sieht, daß er sein eigenes Problem bis zum Ende der Erzählung nicht gelöst hat. Aber es ist schon klar, daß er das nicht leicht lösen kann. Denn das hat eine enge Beziehung mit einer Rassenfrage der Slawen in Wien.

1. はじめに

かつてヨーロッパ最大の多民族国家として繁栄を誇ったオーストリア・ハンガリー二重帝国が，皮肉にもその多民族性の故に崩壊し，その最大の要因となったのが諸民族の独立に向けた様々な動きであったことは，周知の事実である。帝国を直接崩壊へと導いた第一次世界大戦にしてからが，民族独立の理想に燃えたセルビア人青年の，オーストリア皇太子暗殺事件に端を発したものと言われるが，その敗戦によって「ドナウ帝国」が壊滅し，幾つもの「民族国家」が成立した後も民族問題は完全に解決した訳ではない。

ハンガリー，チェコスロヴァキア，ユーゴスラヴィアが独立し，シレヂアはポーランドに吸収され，北イタリアの領土はイタリアに返還されて，現代のオーストリアはヨーロッパの一小国となった。しかし，現在オーストリアの領土となっている土地に昔から住み着いていた「アーリア系民族」以外の人々，ユダヤ人はもとより，かつて帝国を形成していた諸民族が皆それぞれの国へと引き上げてしまったのではない。現在の国境はあくまで政治的決着によって引かれたものであり，昔日の面影は留めてはいないものの，現代のオーストリアもやはり様々な民族を抱え込んだ多民族国家であることに変わりはない。第二次大戦後四十年余りを経て，新たな建設理念に基づき，ドイツ語，否オーストリア語による教育を受けた若い世代が社会の様々な分野で活躍し始め，国家として一見したところ順調な歩みを示しているかに見えるオーストリアではあるが，子細に観察すれば「戦後世代」というべき若い人々の間に，やはりこの民族問題に起因すると思われる幾つかの問題を看て取る事が出来る。

とりわけ今で言う東欧諸国からの移住民の溜り場でもあった首都ヴィーンは，現在でも様々な民族の入り乱れて棲息するいわば民族の坩堝であり，そこで産みだされる文学にも当然そうした事情は，多少の差はあれ，読みとることが出来る。仮にそれを「ヴィーン文学」と呼ぶとすれば，オーストリア語を母国語として創作するしかないスラヴ系オーストリア人の「ヴィーン文学」作家のひとりとして，ペーター・ヘーニッシュを挙げることが出来る。

2. ペーター・ヘニッシュについての概略

第二次大戦中の 1943 年，ヴィーンに生まれたヘーニッシュは，ヴィーン大学在籍中から既にジャーナリストとして働く一方で，ハーモニカの演奏家，ブルースの歌手としても活躍した。その後，文芸誌 „neue wege“ や „wespennest“ の編集者を務め，さらには „wiener fleisch & blut“ という，かのシュトラウスも思わずにやりとしそうな名前の音楽グループを結成し，自らギターの弾き語りをするなどマルチ人間振りを発揮していたが，歌詞として書いた詩のほかにも次第に „hamlet bleibt“ (1971) や，„vom baronkarl“ (1972) といった散文作品にも手を染めるようになって，本格的に作家としての道を歩みはじめることになった。

そうした彼の名を一躍広い社会に知らしめたのは，1974 年に発表された処女戯曲，„lumpazi-moribundus“ である。この作品はほぼ一世紀前のヴィーンに活躍した劇作家で，矢張り彼同様チェコ系移住民の子孫であったネストロイのヒット作 „Lumpazivagabundus“ のパロディーとして書かれたものであった。ネストロイの『ルンパチ』の，とりわけその最終場面に見られる主人公達の俗物根性を批判して，そのまま当時の，そして現代のヴィーン社会の風刺となっているヘーニッシュの『ルンパチ』は，それだけで十分ひとつの考察に値する作品であるが，ここではその翌年に発表された初めての小説作品である『我が父の小さき姿』„Die Kleine Figur meines Vaters“ (1975) を取り上げ，そこに見え隠れする「民族問題」について考察を加えてみたい。

3. 『我が父の小さき姿』についての一考察

作品は，作者ヘーニッシュが父親ヴァルター・ヘーニッシュの生涯を記録するために，父親の話を収録した録音テープや，父が第二次大戦中に母にあてて書いた手紙，父にまつわる祖母の思い出話しなどを再構成して行く過程をそのまま小説に仕立て，父に対する自分の考えを付け加えた程度の，極めて簡単な構成を取っている。

作者の記すところに従えば，父親ヴァルターは，戦時中ナチのプロパガンダのために，ドイツの新聞に戦争の記録写真を提供し，かなり名を知られた報道写真家であった。もしこの話が事実であるとすれば，彼はナチの宣伝相ゲッベルスとも知己の仲であった。

だが，これほどの腕前のヴァルターが写真に手を染めるようになったいきさつは，多分に偶然的なものである。彼にとって主要な関心事は，とにかくあるユニホームを身に着けることであった。それによって彼は他人と同等な人間とみなしてもらえるのだと考えていた。そもそもこのような考えを抱くに到った要因は，ヴァルターの複雑な生い立ちと，一種の肉体的な欠陥にあるようである。ここで言う欠陥とは，作者が作中で繰り返し用いている方言で Schrapp と呼ぶもの，つまり小人或は異常に背の低い人間のことで，若いヴァルターはそのことを非常に気に病んでいたようである。

もう一方の要因である生い立ちについて，作中それについて触れられていることを繋ぎ合わせてみると，ヴァルターの母親，即ちペーター・ヘーニッシュの祖母の家系は，現在のポーランド領リュブニクの出身で，彼女は自分の父親がプロイセンの営林署長であったことに，大変な価値を置いていた。このことは後に述べる二重帝国，さらにはヒトラーに併合されたオーストリア社会における，民族間の社会的「序列」に関係して，重要な示唆を含んでいる。

ヴァルターは，自分の生涯を振り返って次のように語り始める。

「俺の生涯の物語はまず，第一次大戦の勃発直前にヴィーンで生まれて，アメリカやスエーデンの援助で建てられた幾つかの施設で教育され，と言うよりは収容されていた子供の話に始まる。そいつのお袋のうちは，今のポーランドのリュブニクの出で，ずっと前から，自分の親父がプロシャの営林所長だったってことを，なんて言うか派手に自慢してたもんだった。お袋はひどく若いときに，ヤロスラフ・ヘミッシュとかヘニッシュとかいう名前（Jarosulav Hemiš oder Henniš）のチェコ人の床屋とできちまった。それで，しばらくはこのヘミッシュさんとかヘニッシュさんとかと結構うまいことといってたんだ。」(1)

しかし，このヤロスラフ・ヘミッシュは，第一次大戦の混乱の最中，行方知れずになってしまう。ヴァルターの母親は，もとオペラ歌手で，大戦で片手を失ってから後は郵便局員をしているアルベルト・プリンツという男と再婚し，子供のヴァルター，つまりペーター・ヘーニッシュの父親は，カイナー通りの託児施設に預けられ，日曜ごとに母と継父にあって一時の散歩を楽しむことになる。この継父がヴァルターの生い立ちに大きな影を投げかけている。その理由は幾つかあるが，まず重要なこととして，アルベルト・プリンツが，ズデーテン・ドイツ人であることが挙げられる。ズデーテンとは現在のチェコとポーランドの国境地方のことで，この辺りに移住して住み着いたドイツ人達に対してこの呼び名が使われていたのだが，チェコスロヴァキアの独立以来，彼等は「故郷」を追われ，自分たちの故郷を奪ったチェコ人を呪っていた。継父アルベルトもそのひとりで，チェコ人を実の父とするヴァルターの存在を，アルベルトは決して心の底では許していなかった。

母親は自分がドイツ人の血筋をひいていないことから来るコムプレックスから，やがて一緒に暮らし始めた息子が，新しい夫に非道いしうちを受けても非難できない。そのことを，ヴァルターは，次のように語っている。

「新しい親父は，俺をこさえた奴がチェコ人だってことで，俺を許せなかったんだと思う。チェコスロヴァキアが出来てからというものあの男は，あいつがよくいってた言い方をすれば，『大地からひっぱがされた』って気がしてた。だけどお袋が俺をかばってくれることはあんまりなくって，亭主が俺をなぐったりしても，手で顔を覆ってるだけさ。それが，自分がドイツ人じゃないって言う，お袋の劣等感のためだったてのは，ずっと後になってやっとわかったことさ。」(2)

しかし，チェコ人ヴァルターを愚弄するのは，継父アルベルト・プリンツだけではなかった。たとえば，学校の教師が，実の父親が彼に遺した唯一のもの，即ちヘミッシュという姓をからかったりする。

「自分をこさえた男のことを，俺はなんにも知らなかった。戦争の混乱で消えちまったか姿をくらましちまったか，どうやら死んだのではないらしいが，俺に遺していったのは名前だけだった。そしてこの名前を俺は憎んだ。後になって学校で教師が耐えがたい調子で，首を傾げ顎を首にひっつくぐらい引いて聞くのさ，ヘミッシュ (Hemiš)，きみはヘミッシュ (hämisch＝意地の悪い) じゃないのかい，ええ。すると生徒はみんな大笑いして，学校が終わってからもそのことで馬鹿にされたものさ。」(3)

このような惨めな状態を脱したいと願うヴァルターは，とびぬけて体の大きな友達を作って始終一緒に歩くなどして，子供仲間での自分の「地位」を高めようと苦心する。たとえばそのひとつがボーイスカウトへの入団の試みであったが，これはアルベルト・プリンツの，ボーイスカウトはフリーメイソンの集まりだという反対にあって実現せずに終わる。しかし，その代わり，アルベルトの勧めで「ドイツ体操団」に入ることで目的は達せられる。ヴァルターの関心は，何よりもまず，制服を着ることにあったのだから。

彼は，制服を身に着けることで，他の者たちと同等になること，さらには，ドイツ的なものを身に着けたと幻想することができたのである。

「翌朝プリンツ氏は，ドイツ体操団に入団の申し込みをさせた。こんなことは初め考えてもみなかったことだったが，なにしろ俺は（体の大きな）友達にくっついていたかっただけなんだから，だけど結局ドイツ体操団だって，ボーイスカウトだって目的を達する点じゃ同じことだった。わかるかい，制服だよ，制服が俺にとっちゃでかい役をはたしてたのさ。隠れ蓑同然の制服を着て，それで，それまでいつもそうだったシュラップ（ちび）でなくなること，それが俺の夢だったんだ。」(4)

ドイツ的なものの象徴としての制服に対する執着はアルベルト・プリンツにも見られる。しかし，彼の場合の制服は，単にドイツ的なものの象徴にとどまらず，極端に言えば，「ドイツ的なものの支配」の象徴なのである。

「郵便局員になったアルベルト・プリンツ氏は，とんとん拍子で出世した。俺が家に連れて来られたときには電報課長になっていて，また古い二重帝国時代の郵便局員の制服を導入したいと夢見ていたんだ。二重帝国の電報課長にはサーベルをつける権利があったといっていた。もしそうなりゃ，マルタ，そうお袋に言うのが今でも聞こえるようだ。筒形の高い制帽，固いカラー，そして腰にはサーベルを提げて，そうなりゃどこから見たって俺がどんな人物か一目で判るのに。」(5)

この二重帝国にたいする思い入れは単に制服の問題に留まるものではなく，もっと根深く複雑な思いを反映している。

「なにかというとすぐ，自分は帝国と一緒にこの片手と故郷を失ったのだ，と言っていた。その代わり，これは出来れば言いたくなかったようだが，どうしてもそれを補うものが欲しいと思った。デカダンなフランス人と，野蛮なロシア人と，金権政治のアングロサクソン人と，ずる賢いイタリア人にぶち壊された黄金時代に，コモタウで送った芸術家暮らしが愉快だったとすりゃあ，ヴィーンに移ってからの暮らしは深刻だった。だが，その責めを負っている者共，安寧と秩序を葬り去った社会主義者やフリーメイソン，ユダヤ人やスラヴ人めら，今に見るがいい。汚いやりかたで打ちのめされた者たちが立ち上がり，やがて新たな，辺りを払う勢力にまでのしあがるだろう。力強く，健康で，気高いものが己を貫き，邪魔するものは根こぎにしてしまうだろう。」(6)

アルベルト・プリンツが，二重帝国を崩壊へと導き，それ故二重帝国の制服によって支配し，さらには根絶やしにしなければならない，と考えている者たちに，社会主義者ばかりでなく，フリーメイソン，ユダヤ人，そしてここで注目すべきは，スラヴ人が挙げられていることである。スラヴの血こそは，ヴァルターが両親から受け継いだものであり，作者のペーター・ヘーニッシュ自身にも受け継がれているものである。ヴァルターの妻，つまり作者の母親もスラヴ人である。スラヴを逃れ，ドイツ人になること，それは，ヴァルターの代までのヘーニッシュ一族の悲願であったとも言える。あるいは，この時代，ナチの支配下にあったヴィーン，さらにはオーストリア在住スラヴ人大多数の，生存をかけた切なる願いではなかったろうか。

息子ペーターを始め家族の者達皆のために手を尽くしてアーリア人証明書を手に入れた経緯が語られる。

「この封筒の中にはな，いいか，俺の言うことをよく聞けよ，ここにはお前の為に取って置きのものが入っている。あの頃，お前が生まれてすぐ手に入れた大事なアーリア人証明書だ。えっ，なんだって，そんな物要らないって，そんなこと言うもんじゃない。もう一度これが必要にならんとは言えんからな。あの頃だって，誰も俺たちにアーリア人証明書が欲しいか，なんて聞いた訳じゃない。だがとうとうそれを手に入れた時には神様に感謝したものさ。そりゃもう誓ってもいい。

ヒトラーがな，ほかのことじゃ色々いいこともしてくれたがな，そう，なんたって秩序さ，それを打ち建てたのはあの男の手柄だ，それに，働くことを厭わない者には仕事をくれた。そ

のヒトラーが現れた時には大騒ぎだった。なにしろ俺たちみんなにこの書類が入り用になったんだからな。有り難いことに，俺が姉さんと呼んでいたお前の大叔母が，それは口が達者で，それにいくらか手持ちの金もあって，東奔西走，とんでもない遠くにまでとんでって，ありとあらゆる，まだ音信可能な異国にいる人たちに手紙を書いてくれた。叔母さんがどんな無理な要求を突きつけられ，どれほどのことを耐え忍ばなきゃならなかったかは，聞かんでくれよ，とても言えたもんじゃない，ええ，どう思う。」(7)

或いは，ナチ党の中で認められ，党の重要人物になったことで，「今度はただちゃんとした党員だと言うだけじゃない。有象無象の間で矢表にたたされる人物になった。いってみりゃ党の寵児になったって事だ。もう昔のシュラップ（ちび）じゃない。ヒトラーユーゲントの分団指導部のカメラマンだ」(8) と誇らしげに語るヴァルター。彼はさらに，戦時中未来の妻にあてた手紙の中で次のように書く。

「職業の面ではもう言うことはない。報道の分野で幾つも素晴らしい仕事をしたし，この分野ではヘーニッシュという名前は，ますます知れ渡っている。これで完全に俺の名前は，もうヘミッシュ (Hemiš) ではなく，ヘーニッシュ (Henisch) になった。宣伝省ではもっぱら，大ドイツ国防軍にはチェコ人なんかいない，と言われている。お前だってローゼリ，生まれながらのチェコ人だけど，将来の名前がドイツ語になるのに反対はないだろう。いずれにしても俺たちの将来のことで特別煩うことはほんとにもうなにもないんだよ。」(9)

写真家ヴァルターにとって，写真を撮ることはドイツ的なものに同化し，ドイツ人になる為の手段であるかにさえ見える。誰のために，どんな党の為に働くかはどうでもよい。変節漢であろうと詐欺師であろうとよい。すべては生存の為である。ヒトラーユーゲントのひとりだったヴァルター，ナチの宣伝家だったヴァルターが，戦後はソ連軍につき，オーストリア共産党の機関誌のために写真を撮ったことは，従って，彼の中では少しも矛盾することではない。そのくらいだから，彼が身につけたドイツ的なもの，成りすましたドイツ人も，時代の要求がなくなればサラリと脱ぎ捨てられるのかもしれない。

「いいか，お前，そもそもこういうことは，そんなに無茶なことじゃないんだ。大事なのは，血を平静に保つことだ。綱を渡るのに，お前がユダヤだろうと，ナチだろうと，共産主義者だろうと，そんなことはどうでもいい。バランス棒が，そう，それは勿論お前の内心の平衡をしめすバロメーターでもあるんだが，バランス棒が水平を保っていれば，何もかもオーライさ。バランス棒が水平を保っている限り，その後からついて行くほか何もする必要はない。バランス棒がお前を導いてくれる。」(10)

こういう生き方に反発する息子に，父親はさらに続けて言う。

「たとえお前が俺の綱渡りのやり方を嫌おうと，外に何が残ってる。さあ墜落という時に細かいことは何の役にもたたん。唯一大事なことは，墜落をなるたけ先まで引き延ばすことだ。お

前のように，バランス棒なしでもやってけるなんて思い上がると，墜落の危険はますますでかくなる。」[11]

さてここで，父親の批判者である作者ペーターの立場に焦点をあてなくてはならない。彼は，父親の生き方に憎悪を抱いてはいるが，父親の生涯を知ることで，そしてそれを記録にとどめることで，自分自身に出会えるのではないかと考えている。

作者ヘーニッシュは，この作品を書き始めた動機を，「誰かの後について行けば，自分に出会う，こんなことを私は，何年かまえ別の関連で書いたことがある。それが今の私達ふたりにぴったり来るような気がする」[12] と述べている。つまり，これを書き始めたのは，自分のアイデンティティー探究の試みが，父親ヴァルターのアイデンティティーの探究に結びつくと考え始めたからである。

これは，実は父親が撮った自分の子供の頃の写真に，すでに暗示されていたことであった。その写真の中で，父親はナチの戦車隊の制服を着，母親はディアンドゥル（南ドイツ，オーストリア地方の民族衣装）を身に着け，自分は頭に父親の，帝国鷲章と鉤十字のついた帽子を載せている。この写真のために，作者ヘーニッシュは子供のころからずっと父に対して距離を置いてきたのだが，見方を変えれば，父親をはじめ自分たちは，いわばアイデンティティーを捨てることによってアイデンティティーを得たのであり，この写真はそういう自分たちの生存のしかたを象徴していると言えよう。

だが，このことは，ただ単に嫌悪してそれで済む問題ではない。自分自身の生き方の根本に関わる問題なのである。自分のスラヴ性を捨て，姓をドイツ語に変え，ドイツ人になることによって生き延びてきた人間のアイデンティティーの喪失は，前出のアルベルト・プリンツに見られたような，土くれ（故郷）を失っても，ドイツ的な物に対する確信，即ちアイデンティティーは決して失わないズデーテン・ドイツ人の苛立ちとは本質的に異なるものである。一端捨てたアイデンティティーは，容易に回復することはできず，逆に選び取ったアイデンティティーといえども，次等にその人間の生存を規定し始める。

写真を撮るためには，ドキュメントを集めるためにはどちらの側につくなどということは問題ではない，生存の為には多少の真実を犠牲にしても仕方がない，という父親の処世を批判する息子に，それならお前は本当に真実しか書いていないかと，問い返し，「それに，お前は幸運なことに，生まれたのが遅かった」[13] と言い添える。

父親のこの言葉は，現代のヴィーンでは，スラヴ系の人種といえども殆ど肩身の狭い思いをすることはないだろうが，と言う意味あいも含んでのものかもしれない。しかし，それでもなお彼等が既にドイツ語しか話すことのできないスラヴ人であるという事実は変わらない。

作者自身，自分の内にあるものは，良いものも悪いものも，美しいものも醜いものも父親の性格の中に認め得る，しかし，それによっては自分の内にある，父親にたいする矛盾した感情は完全には説明出来ない，結局，父親の語る話しは自分自身の話しの中心，或は核心をぼかすことになり，自分の語る父親の話しを書かなければ父親の真相，ひいては自分のアイデンティティには迫れない，と考える。[14]

だが，作品の最後にいたるまで，とうとうその目標は達せられない。結局，一度死にかけた父親ヴァルターが，政治家の宣伝写真など撮ることはきっぱりやめ，残り少ない生涯を，本当のも

のを撮ることだけに専念しようと決意する(15)ところで，作品は終わっている。

問題は提示されただけである。そもそもこの問題に解決などないのかもしれないが。

4. おわりに

この一文は，私的な集まりで発表したものに多少の手直しをしたものである。発表後，筆者の使用したテキストは既に絶版となっており，大幅に書き直された新版が出ていることを知った。その版によって筆者の述べたことがどのように変わっているかはこの文を書くにあたっては検討することが出来なかった。別の機会に試みてみたい。

注

テキストは，Peter Henisch : Die Kleine Figur meines Vaters. Fischer Taschenbuch Verlag. 1980. に依った.

(1) Henisch : Die kleine Figur meines Vaters. S. 10f.
(2) a. a. O. S. 28.
(3) a. a. O. S. 11.
(4) a. a. O. S. 43.
(5) a. a. O. S. 25.
(6) ebenda
(7) a. a. O. S. 53.
(8) a. a. O. S. 54.
(9) a. a. O. S. 70f.
(10) a. a. O. S. 147.
(11) ebenda
(12) a. a. O. S. 17.
(13) a. a. O. S. 83.
(14) a. a. O. S. 130f.
(15) a. a. O. S. 156.